

第55回九州芸術祭文学賞 選考経過と講評

宮崎県の今年度の応募数は20編。昨年より2編少なかった。男女の内訳は男性11名、女性9名。年代別では30代1名、50代3名、60代10名、70代3名、80代3名。60代が最も多く、今年は20代と40代の応募がなかった。

審査は例年通り応募者の名前を伏せた上で厳正に行い、まず以下の11編を一次選考通過作とした。

受付順に「砂漠の雪」「毒盛り」「えっちゃん」「歯噛み」「さとねりとかがやき」「美依は知っている」「茶屋の梅」「とぎれとぎれの夏」「紅い花」「慕情」「ダークエンパス」

この11編を再度、テーマ、構成、文章力など、さらに細部にわたり話し合い、「砂漠の雪」「えっちゃん」「歯噛み」「さとねりとかがやき」「とぎれとぎれの夏」「紅い花」の6作品を二次選考通過作とした。

そこから長時間の議論の結果「とぎれとぎれの夏」が地区優秀作に、「さとねりとかがやき」が地区次席に決まった。

以下、受付順に応募作の感想を簡単に述べておく。

「生前葬」 「私」の目標は親しい友を喜寿の祝いを兼ねたランチ会に誘うこと。それは祝いの会であり生前葬でもある。目標に向かって前向きに生きる姿が日記風に書かれている。文章に散漫なところも見られ、整理して書けばよい物語になると思う。原稿は縦書きで。

「洞窟」 特別な生殖器を持つ明美はそのために離婚され、その後出会った男とも別れることになる。母親も同じ悩みを持っていたことを知り、心を打ち明け合った母娘は旅に出る。旅の明るい風景はこれからのふたりの未来を想像させるが、テーマは生かし切れていない。

「赫」 刑務所帰りの男は赫いネオンの色にひかれ辿り着いた街でボディを組むようになった男にも本心を明かさない。男は愛した女の代わりに殺人の罪を背負っていた。やがて男は女と再会し旅立っていく。テッパンネタだが思わず引き込まれてしまう上手さがある。

「砂漠の雪」「私たちは商品なのだ」と言い切るマッサージパーラーで働くサニ。父親を知らないサニと息子との人生を断ち切らねばならなかったレッドの疑似親子関係へと展開していく後半は穏やかな光を感じるシーンもあるが、ラストは唐突な気がする。

「ウィリスの置き土産」 随想として読めるこの作品は医学史など興味深いものがある。しかし小説としては本編から始めて、半兵衛、藤助、お登与を時代の波の中でもっと自由に動かしてロマンに満ちた世界に誘って欲しかった。

「毒盛り」 延岡藩主内藤政義配下の佐藤源八という若者の海賊退治の英雄譚。実はそれが偽物であり、源八は焼き討ちにされる。その恨みを源八の妹が毒饅頭で晴らす。文章は簡潔で歯切れよく県北の地名や毒草の効能などがうまく取り入れられ巧みである。

「えっちゃん」 気功士の「私」が居酒屋で隣に座っている「あなた」に語っていく設定で

書かれている。肝臓癌で亡くなる元ヤクザ「千春ちゃん」との出会いと別れが人情味豊かに描かれ「私」の気取りのない語りにも心を揺さぶられる作品である。

「宮崎県立図書館の都市伝説」 交通事故で亡くなり幽霊となった恋人のユリ。そのユリが図書館に現れるがユリは僕だけにしか見えない。僕を励ますユリ。ファンタジックな映画を観ているような爽やかさがあり、甘いロマンを漂わせた都市伝説になっている。

「歯噛み」 戦況は日に日に変化する戦争末期、パラオでカカオ栽培に取り組む青年は出荷中止の連絡が入る中、軍から注文の入ったカカオが一人の潜水艦機関士を死に追いつめたのではないかと悔やむ。骨太の作品だが、ラストはもう一步踏み込んでもらいたかった。

「さとねりとかがやき」 孤児院で育ったゲン。父親は宮崎出身らしいとわかるが阪神大震災で手がかりは消失する。30年後俳優になったゲンは博多の定食屋で頼んだ「さとねり」から父親の過去がわかる。女性記者の長い手紙などの欠点が惜しまれるが評価できる作品。

「美依は知っている」 引きこもり男のラブドール「美依」との妄想性愛物語。抑制できない性欲のはけ口として購入したラブドールだったが次第に大切な存在となる。そこへ妹が両親の介護を押しつけようとやって来る。「役割」とはを考えさせられる物語でもある。

「番鬼にあらず」 中国・明に拉致された主人公が故郷の日向の地に舞い戻り戦乱の地に唐芋を普及させるという英雄譚。文章は練られて簡潔で筋立てもわかりやすい。ラストの見上げた空に浮かんだ幼い村娘「咲」の顔を形作った雲が印象的である。

「茶屋の梅」 茶屋「岡ぜん」の看板娘、喜代と佐代。佐代が仲井忠兵衛に嫁いだ後、「岡ぜん」を出た喜代は「くみ」と名を変え折生迫に住む。文章は簡潔でよどみがなく、江戸末期の清武郷とその近辺の地域や気候風土、産物が随所に登場していてリアリティがある。

「とぎれとぎれの夏」 一人暮らしの伯母の支援をすることになった「私」。伯母の偏屈で激しい性格は、40数年前の小4の夏休みに伯母が娘の愛子を折檻する姿が鮮烈な記憶として残っている。後半の送迎の車中、伯母の心が解けていくさまは読ませるものがある。

「紅い花」 観光ホテルで働く「わたし」はホテルでコンパニオンとして働く若いベトナム人女性ホアンの窮地を救う。タイトルでもあるホアンの内股の入れ墨「紅い花」。ホアンの身に何があったのか、もう少し触れて欲しかった。文章の卓越さ、手馴れて欠点のない作品。

「慕情」 10年前、母の葬式を終えたその夜、高3だった雪野は家を出る。父の死の知らせで故郷に戻った雪野は残った3頭の子牛を見て父の跡を継ぎ酪農をやる決心をする。恨んでいた父親の本当の優しさを知り新たな出発をしようとする毅然とした雪野の姿がいい。

「指四本」 重いテーマであり、貧困と差別に苦しみ続けてきた主人公の怒りと悔しさが息詰まるほどに描写されている。救いは妹の妙子が父の葬儀の後で、自分たち兄妹につらく当たった母を引き取りたいと言うシーン。60枚では語りきれない内容である。

「ダークエンパス」 ダークエンパスと呼ばれる性格の妻との出会いからラストまで海水が波打ち際の砂を少しずつ浸食していくように計算されて書かれている。テーマは掴んではいるが作品全体からみるとダークエンパスという言葉はまだ十分に生かし切れていない。

「生き証人」「壯」は語る「戦後、日本とアメリカとの友好と確執」 元中学校教師の壯

は、今の経済大衰退の原因は「進歩主義教育」にある。故に教育理論を「能力主義教育」にかえれば解決すると語る。壯の悲願を歴史の流れの中で小説として訴える作品にして欲しかった。

「ホシャドン」 東京の会社に就職して3年目の直之。ある夜ふとしたきっかけで親友を亡くしたときのことを思い出し、身心に異常をきたして会社を辞め、高千穂夜神楽を見る旅に出る。そこでホシャドンという舞手に惹かれてのめり込んでいく。爽やかな読後感の物語。

以上20作品、どれも訴えるもののある力作だった。